

芭蕉翁彰頭

第96号 令和6年3月

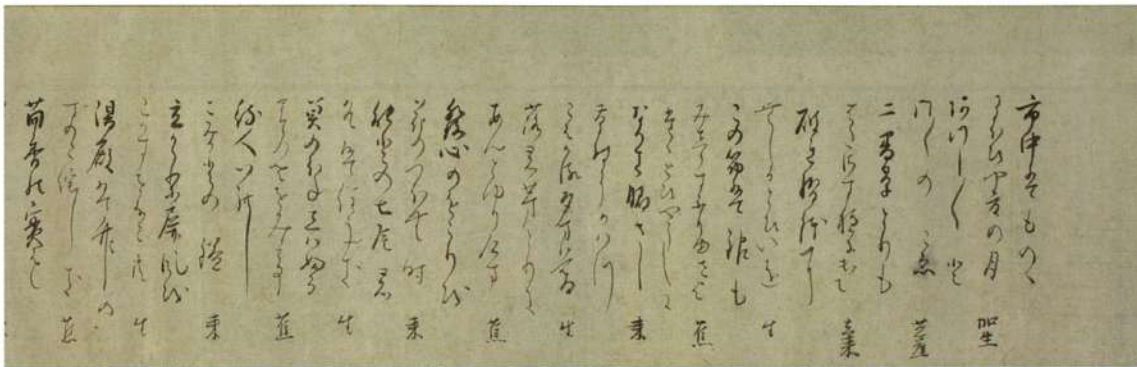
春なれや
名もなき山の

薄霞

芭蕉



名品解説 芭蕉筆「市中は」歌仙卷子



芭蕉筆「市中は」歌仙卷子

元禄三年（一六九〇）六月、京の凡兆（加生）宅で興行された芭蕉・去来・凡兆による歌仙を、芭蕉自ら書き留めたものです。ふつう歌仙は、二枚の懐紙を用い、一枚目表に六句、裏に十二句、二枚目表に十二句、裏に六句書きます。本作品は、そうした歌仙懐紙の形式に則っていないことから、歌仙を巻き終えたのちに書き留められた手控えと考えられます。

「市中はもの、にはひや夏の月」ではじまるこの歌仙は、翌年七月に出版された『猿蓑』に収められましたが、本作品と『猿蓑』収録の本文を比較すると、十四句に異同がみられます。例えば、本作品では四句目は「破れ摺鉢にむしるとびいを」となっていますが、『猿蓑』では「灰うちた、くうるめ一枚」となっています。芭蕉は「文台引き下せば、すなはち反故なり」（『三冊子』）という言葉を残しましたが、実際には撰集に収めるにあたって連句を推敲していたということなのです。しかも、「市中は」歌仙には本作品以外にも草稿段階の本文を記した資料が複数伝わっており、一度きりではなく何度か推敲を重ねていたことがわかります。これら複数伝わる「市中は」歌仙の草稿は、芭蕉たちの連句制作の裏側を知ることができるという意味で興味深い資料ですが、そのなかでも本作品は最も成立が早く、且つ芭蕉自筆のため資料としての信頼性も高く、特に貴重な資料と言えます。

『猿蓑』は、幾度もの旅の経験のなかで模索してきた新風を世に問うべく編まれた俳諧撰集で、芭蕉の熱意が随所にうかがえますが、本作品もあわせて鑑賞すれば、芭蕉の新風にかける思いがより一層強く感じられます。

（伊賀市文化振興課学芸員 服部温子）

巻頭句解説

貞享2年（1685）、「野ざらし紀行」の旅の途中、伊賀から奈良へ向かう道で詠まれました。山々に薄く霞がたなびく、早春らしい景色を詠んでいます。奈良のあたりには吉野山や香具山、龍田山、初瀬山など歌枕として名高い山が多くありますが、そういった山ではなく「名もなき山」を取り上げたところに俳諧らしさがあります。

顯彰芭蕉翁

第96号

編集・発行／公益財団法人

芭蕉翁顯彰会

〒518-0873

三重県伊賀市上野丸之内1-1-7の13／電話0595・21・4081